

私と国有林

「多様性と国有林の森作り」

日本写真作家協会

山口

芳男

私の生まれは栃木県足利市です。六歳まで過ごし、父親に連れられ足尾や日光の山に行ったことや、渡良瀬川でナマズやウナギを捕ったことを幼いながら鮮明に覚えています。その後、茨城県稲敷市に移ってから、遠足などで数回筑波山に登ったこと以外は、鎮守の森が唯一の遊び場、毎日暗くまで遊んでいました。今のうちにゲーム機など無い時代は皆、自然が遊び相手でした。

山岳地の登山は、ツガやカンバなどがうつそうと茂る天然林を抜けて森林限界を越えたところに、荒々しい巖峰が忽然と現れ、達成感を味わう醍醐味です。

私は45年間、山岳地の国有林を奥深く日参し、四季折々に光と樹木や草花が作り出す大自然の造形美をカメラでスケッチすることに情熱を傾けました。

さて、私が登山を始めた頃、よく行った奥多摩の山小屋の主人に、山とのつきあい方をいろいろ教わりました。その中でも、水場では頭を下げて感謝し礼をするようにと言われ、春の芽吹き時期は、水を一番必要としている木々や草花にやり、お前たちは少し我慢しろと、水の大切さ

を教えられました。今でもこの習慣が身についています。



初めて森林限界を超えた山（ハケ岳）

そして、ここ数年、高尾山で撮影活動に従事して思うことは、杉檜以外の草木の価値に対する思いやりの心を林業従事者をもっと持つてほしいと思うことです。例えば、林道脇の杉の木に巻き付いて毎年花を咲かせて多くの登山者の目を楽しませて

いたジャケツイバラも、今年、林道の草刈りの時に根元から切られてしまいました。



日影沢の清流（高尾山）

林業的には邪魔者のツルの仲間ですが、人々が自然の草花や生物との出会いを求めて訪れる高尾の森だからこそ、数千本の植林木のうちの一本を、年に一度だけ鮮やかな黄色い花を咲かせるジャケツイバラの支持



杉木を覆うジャケツイバラ

木に供してもよいのではと考えてしまふのです。一方で、東京都の偉い人が杉花粉症や檜花粉症の急増に配慮して、せっかく育った杉や檜を伐っています。他の草花での花粉症の人にもいるにもかかわらず。人に害があるから根絶するのではなく、人は他の動植物に対して共存できるように仲裁に入り、植生の豊かな森を作る知恵を生み出すべきだと思います。左の写真はツルを人の高さで切るだけで萌芽再生を促し、樹木の成長に害も無く、ツルの種を継続する簡単な工夫（配慮）です。



共生のツルの切り方

国有林は国民の森であり、地球の森です。地球環境を守るために、人類と自然との関わり合いについては一元論者や二元論者、多元論者などの様々な意見を聞き、生物多様性と共存する森作りを推進するべきと考えます。これからも写真家としてできる生物多様性作りを続けていこうと思います。